

在宅高齢者の自己実現尺度の開発の研究

— 自己実現尺度開発と自己実現概念の操作的定義 —

清 重 哲 男*

抄 録

本論文は、在宅高齢者の自己実現尺度を開発することを目的とした。カント、ニーチェ、マズロー、シェーラーの4人の思想家の著述から自己実現の基礎概念を作成した。先行研究とデンマークでの事前調査から451個のキーワードを抽出し、調査項目を作成した。事前に予備調査を行い、本調査を行った。本調査の方法は、在宅高齢者1,120人を対象とした自記式質問紙による郵送調査であった。有効回収数は413票（36.8%）であった。信頼性分析、因子分析を繰り返し行い、17評価項目の自己実現尺度を抽出した。尺度の探索的因子分析の結果、5因子を抽出した。

分散分析により、基本属性の「判断力」と「電話・メールの頻度」が高い高齢者は「自己実現トータルスコア」が高いことが確認された。尺度の信頼性、妥当性は満足できる内容であった。尺度の因子構造を共分散構造分析により検証し、モデルとの適合度が満足することを確認し、「自己実現尺度（SAT-17）」は開発された。尺度の因子構造から自己実現概念を操作的に定義した。

Key Words : 自己実現, 在宅高齢者, 尺度, 共分散構造分析, 因子分析

I. はじめに

本論文は、在宅高齢者の自己実現尺度を開発し、自己実現の概念を明らかにし、因子構造から自己実現の概念を操作的に定義することを目的としている。

介護保険制度が実施され、権利擁護が特に強く求められてきている今日、ソーシャルワークの援助目標や社会福祉の支援方法の領域では、QOLの理念を越えた支援の目標やその到達の把握の方法の基準として、利用者の日常の生活の在り方を評価する自己実現尺度の開発が非常に重要となってきた。

また、自己実現尺度の開発は、これからの新たな国民的課題であると同時に、社会福祉政策における、重要な目標の一つであるといえる。研究に

* Kiyoshige, Tetsuo
NHK学園社会福祉士養成課程 非常勤講師
日本ソーシャルワーク研究会会長

先立ち、福祉先進国であるデンマークにおいて、在宅高齢者の自己実現の支援に取り組んでいる実践モデルの先行調査を行い、多くの示唆を得た。本研究では、哲学、心理学、価値倫理学、及び社会福祉学の分野で自己実現に関連するQOL、自己決定などの先行研究を調査し、それらを基礎として自己実現の尺度開発の研究を行った。

「自己実現」ということばが最初に使われたのは、心理学の分野においてゴールドシュタインが1939年に、『*The Organism*』(Goldstein 1939)の中で使用した概念であるといわれている(Maslow =1987: 72)。その後、マズローが「欠乏欲求理論」の中で最上位概念として自己実現を位置づけ、自己実現に関する概念を論証している(Maslow = 1987: 55-71)。

マズローを含めアメリカの心理学の基礎哲学は、歴史的にニーチェ及びヨーロッパの人間に関する実存主義哲学の思考の影響を受け進化してきている(Maslow = 1964: 27-8)。

わが国の社会福祉制度において、平成14年に公布された障害者基本計画の中で、「基本的な方針」として、「自己選択」と「自己決定」と共に、「自らの能力を最大限発揮し自己実現できるよう支援する」ことを規定している。しかし、自己実現の内容について具体的に何も明示されていない。これまで社会福祉学分野では、自己実現に関する実証的研究及び概念定義の研究は、ほとんど行われてきていない。

本研究では、社会福祉学の視点から自己実現の概念を構築することとした。自己実現の概念の根源を、在宅高齢者は生きて生活している一人の人間であるとの認識に置いて、カント、ニーチェ、マズロー、シェーラーの4人の哲学者や心理学者の思想を基本に、人間の本質論から出発し自己実現の基本概念を構築した。

カントは、人間の存在と行為、善い意志のあり方及び自律について言及し、「人格は客体的な目的であり、現に存在すること自体が目的である」(Kant = 2000: 64)と、人間は存在自体が目的であることを述べている。また「人間は、単に手段

としてのみ必要とされるのではなく、人間は行為の実践に際して、それ自身が目的自体だ」(Kant = 2000: 66)と人間を手段として利用してはならないことを述べている。カントは「実現に努めることが義務であるような幸福が問題となるならば、それはほかのひとたちの幸福でなければならない」(Kant = 2002: 253)と他者の幸福実現に支援することは義務であると論じている。

ハイデッガーによれば、ニーチェは「意志はそれ自体力である。そして力とは、それ自体において絶えることなき意欲である。意志は力であり、力は意志である。」(Heidegger = 2007: 57)と論じている。特に、自己否定に陥った人間の生きる目標を「至高の諸価値がその価値を剥奪されるということ、目標がかけている。『何のために?』への答えが欠けている」(Nietzsche = 1970: 22)と述べ、生きることの意義の大切さを「ニヒリズムからの脱却」(Nietzsche = 1970)の中で論じている。

マズローは自己実現について「自己実現とは、完全に熱中し、全面的に没頭し、無欲になり十分に生きいきと経験することを意味する。この瞬間において自己が自ら実現しつつある時なのである」(Maslow =1991: 56)と述べている。また、「自己実現しつつある人びとは……、体外にある目標、すなわち自分自身の外にある何かに従事している」「それ以上究極的なものに還元できない本質的究極価値の探求に没頭し捧げている」(Maslow =1991: 54)と論じている。また「自己実現とは、潜在的な能力、人間の可能性を実現することである」(Maslow =1964: 260)と潜在能力の実現であることを述べている。

シェーラーは、「人間とは何か」という命題に、4段階の価値序列(Frings = 1989: 119)を唱え、「精神的諸価値のためには生命価値を犠牲にする『べき』である統一体である」(Scheler =1976: 204)と述べている。また、シェーラーは「愛は、人格的なものに向かう作用であり、聖価値である」と述べている(小倉1989: 105)。「愛の作用」(Frings = 1989: 120)により他者とわか

わり、「世界平和や人類の幸せを絶対者に祈る」(Frings = 1989 : 16) ということの普遍妥当性を論じている。4人の思想家に共通した理念は、「人間とはなにか」そして「生きることは何か」を命題とし、個人の人間の行為の主体と自己の成長の意義を、他者との交わりを通じ論証していることである。

QOLの概念は、がん治療の分野で1970年代に始まり、これまで多くのQOL尺度が開発されてきた(高橋 1995)。QOL概念は、医療の介入前と介入後の医療成果を比較するアウトカム評価として展開されてきた(岩谷・飛松 2005 : 17)。アウトカム評価は、「健康」概念を中心に日常生活動作能力: Activities of Daily Living (以下ADL)を基本に研究されてきた(江藤 1995 : 12-22)。その後、新ADL概念である手段的ADL (I ADL)、さらに生きがいや人生の幸福感、WHOの主観的幸福感尺度 (WHO Subjective Well-Being Inventory) (Sell 1992)、生活満足度、などが組み入れられてきた。

人間の幸福感や満足度について、米国ではLawton (1975)らが老年学の立場から主観的幸福感の測定尺度PGCモラル・スケール1を開発している。主観的幸福感の測定尺度は、PGCモラル・スケールの日本語版が前田ら(前田・ほか 1979)により開発され、日本語版PGCモラル・スケールとして導入されてきている。

「生きがい」について、長谷川・ほか(2001 : 147-170)は、生きがいの「対象」と、湧いてくる「対象」への感情、を総合したものとして捉えている。「対象」には、過去の経験、現在の出来事、未来へのイメージが含まれている。これに「伴う感情」には、自己実現と意欲、生活充実感、生きる意欲、存在感の4つの感情が含まれているとしている。

高橋・ほか(1999 : 109-118)は、中国の都市高齢者の「生きがい」について次のように述べている。生きがい感は、よろこび、満足感、幸福感、充実感に深く関連している。そして、中国の都市高齢者の生きがいは、仕事を通じての社会的

貢献や奉仕、及び伝統的な家族制度における家族・親族との交流と深いかかわりがあることを報告している。

自己決定について、松村・ほか(2001 : 19-25)は、家族と本人が共に納得できるケアの方向性の提供、及び療養者本人の利益の優先、の2点が重要であることを述べている。

佐藤(1998 : 96-105)は、自己決定の方法として7つのカテゴリーがあることを述べている。意志や希望を聞く、動機づけをする、情報を提供する、一緒に考える、同意を得る、認める、意欲を引き出す、の7つのカテゴリーである。

佐瀬(1997 : 87-96)は自己決定を7つのプロセスとして報告している。最初に、主体的決定、与えられた選択に順応、家族の決定に委託、家族の決定に忍従、家族の決定に譲歩、決定不能、決定に関与しない=他者決定、の7つである。

先行研究から次のような知見を得た。高齢者の介護者の介護負担感の少ない状態は、自己実現の概念と共通する要因を持っている。ADLを拡大したIADLの概念の捉え方は、「QOLを拡大した概念が自己実現」につながるという把握の方法と関連性がある。また高齢者の異性への感情をプラス思考で配慮した支援方法やエイジズムへの取り組みは、高齢者の自己実現に向けた社会的支援体制を構築するために必要とする内容である。このことは環境因子として地域活動への参加を可能とする取り組みを推進することにつながる。こうした生活要因を高齢者が主観的に評価する生きがいや生活の満足度の評価の方法は、自己実現を高齢者が主観的に評価する内容や方法に共通する要因を含んでいる。

II. 調査の方法

1. 調査項目の選定準備

カント、ニーチェ、マズロー、シェーラーの4人の思想家の著述並びにQOL、生きがい、自己決定の先行研究及びデンマークでの先行調査から451個の自己実現関連キーワードを抽出した。

キーワードをKJ法により25小項目に分類整理し、領域別に自己実現概念に重要な111個のキーワードを抽出した。111個の各キーワードから74原案質問文を作成した。プリテストの実施前に、C市の老人クラブに所属する3人の高齢者を対象としヒヤリングを実施し、74原案質問文の必要性と各項目の文章表現の適正を評価し、その結果に基づき削減し、63質問項目を抽出した。

さらにデイサービスセンター利用者11人、福祉系大学教員1人、社会福祉士1人を対象に、3回の事前予備テストを実施し、表面的妥当性の観点から、63質問項目の文章表現を項目ごとに吟味し、必要な修正を加え、重要性が低い質問項目を削除した。こうして最終的に、プリテスト調査項目の50項目を選定した。50質問項目を基に自己実現調査票を作成し、予備調査を実施した。

2. 予備調査（プリテスト）の対象と方法

本調査の前に、プリテストを実施し、本調査用調査項目を抽出し、本調査を行う諸条件を確認した。調査対象者は、関東地方のK県C市（人口230,941人、高齢化率17.6% 2005年調査による）に居住する比較のお元気な在宅高齢者（65～80歳）から110人を住民基本台帳よりランダムに抽出した。

調査方法は、自記式質問票を調査対象者へ郵送し回答を依頼した。調査期間は、平成17年8月15日～25日であった。有効回収数は42票（38.1%）であった。調査票に調査依頼文を同封し、本研究の目的、回収したデータは個人が特定できないよう処理すること、調査票は無記名で同封の封筒で返送することなどを説明し、対象者への倫理的配慮を行った。

調査項目は、自己実現調査50項目、基本属性15項目、合計65項目であった。回答は5点式リッカートスケールとした。回収したデータを分析し、自己実現に関する24項目の仮尺度を作成した（表3）。

3. 本調査の対象と方法

本調査の調査対象者は、プリテストと同じ関東地方のK県C市に居住する比較のお元気な在宅高齢者（65～80歳）を住民基本台帳よりランダムにサンプリングし、1,120人を抽出した。調査票の目標回収数を401人以上と設定し、回収率を36～40%と予測した。

調査方法は、返信用封筒を同封した自記式質問票を調査対象者へ郵送し回答を依頼した。調査期間は、平成17年12月15日～平成17年12月28日であった。回収した欠損値が特に多い18ケースは集計せず、除外した。有効回収数は413票（36.8%）であった。

調査票に調査依頼文を同封し、本研究の目的を説明し、回収したデータは個人が特定できないように処理すること、調査票は無記名で同封の封筒に入れ返送するようことなどをお願いし、対象者への倫理的配慮を行った。24質問項目の仮尺度を組み込み、本調査票を作成し、郵送により実施した。

4. 調査内容

調査内容は、自己実現調査24項目、基本属性16項目、合計40項目とした。回答は5点式リッカートスケールとした。各調査内容の具体的内訳を次に説明した。

基本属性の項目は、年齢、性別、現在の住まい、どなたと同居、収入の仕事、同居家族人数、仕事の程度、最終学歴、移動の方法、最長勤務、判断力、食事について、聴力、電話やメールの回数、外出頻度、収入金額、の16項目とした。

在宅高齢者の自己実現調査項目は、プリテストの結果に基づき、データの度数分布、因子分析、信頼性分析から導き出された項目を、4名の社会福祉の専門家によりワーディング検討会を2回実施し、詳細に精査し、表面的妥当性を確認した上で本調査用の24質問項目の仮尺度を抽出した。24質問項目のクロンバックの α 信頼性係数は、0.8914であった。このことから、内的整合性は十分確保されていたといえる。第1質問項目

は、「現在、どの程度趣味に取り組んでいますか」であった。24質問項目の因子分析の結果、7領域が抽出された。回答は5点式リッカートスケールであった。

5. 分析方法

本調査の分析方法として、記述統計、クロス集計、信頼性分析、因子分析、分散分析、共分散構造分析を使用した。記述統計により、観測変数のバラツキの大きさと度数分布の正規分布への適合性を確認した。

クロス集計により、主な基本属性相互の関係性の確認をした。「電話・メールの頻度」と「現在の健康」のクロス集計を行い、Pearsonのカイ2乗検定を行った。

信頼性分析により、多くの測定変数の中からI-T相関が最も低い項目（項目を削除した時、クロンバックの α 係数が最も高い項目）を削除し、重要度の高い項目を残し尺度項目の選定をした。因子分析により項目削減、及び17項目から構成される尺度の望ましい下位尺度（因子構造）の抽出、遊離因子がないことの確認をした。また因子に合理的で適切な命名を行った。分散分析により、基本属性が自己実現トータルスコアに及ぼす影響を確認した。「自己実現トータルスコア」を「従属変数」とし、「16の基本属性」を「独立変数」とする多元配置分散分析を行った。ステップワイズの分散分析により基本属性の有意確率の変化を明確にした。

共分散構造分析（確認的因子分析）により、尺度の因子構造を検証した。まず、5因子からなる1次因子モデルの適合性を検証した。次に、5因子モデルに2つの2次因子を想定した2次因子モデルの適合性を検証した。

分析には、①SPSS 11.5 J for Windows（度数分布、クロス集計、信頼性分析、因子分析、分散分析）、②Mplus Ver.3.11 共分散構造分析（確認的因子分析）を使用した。

Ⅲ. 研究結果

1. 分析対象者の基本属性の概要

「年齢」（ $n=408$ ）の平均は72.4歳であった。最高年齢は80歳（4人）、最低年齢は65歳（11人）であった。年代区分では、65～69歳が27.0%、70～74歳が38.0%、75～80歳が35.0%であり、正規分布ではないが天井効果、床効果はなく正常であった（図1）。

「性別」（ $n=401$ ）では、男性が201人（49%）、女性が209人（51%）であり、ほぼ同数であった（表1）。

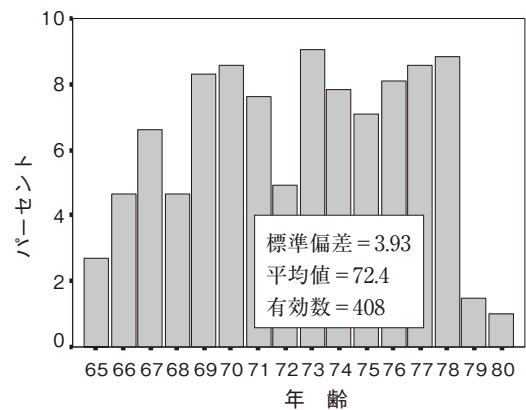


図1 年齢の分布

表1 「性別」

	人数	%
男	209	51.0
女	201	49.0
計	410	100

「最終学歴」（ $n=431$ ）については、「新制高等学校」が最も多く43.4%であった。次いで「新制大学・大学院」（24.7%）、「新制中学校」（19.1%）の順であった。「新制大学・大学院」が24.7%と新制中学校よりも高く第2位であった（表2）。

表2 「最終学歴」

最終学校	人数	%
新制中学校	75	19.1
新制高等学校	170	43.4
新制各種専門学校	21	5.4
新制短期大学	29	7.4
新制大学	94	24.0
大学院	3	0.7
計	392	100

2. 自己実現尺度 (SAT-17) の抽出

分布を示さない項目 Q13「趣味のある生活は大

尺度項目を、24観測項目から17項目へ削減す 切だと思いませんか」を削除した(表3)。

る手順の最初に観測変数の度数分布が正規

表3 質問項目の平均値と標準偏差

観測変数	24項目のステートメント	n	平均値	SD
Q 1	現在、どの程度趣味に取り組んでいますか	413	2.48	1.23
Q 2	同年輩の人と比べてあなたは現在健康だと思いませんか	413	2.56	1.07
Q 3	世の中のために、役立つことをしたいですか	408	2.65	0.86
Q 4	地域のおまつりや老人クラブなどの集まりに参加したいと思いませんか	409	3.25	1.08
Q 5	毎日の生活の中で楽しいことがありますか	405	2.16	0.96
Q 6	人との出会いは、楽しいと思いませんか	404	1.92	0.81
Q 7	最近、お知り合いと一緒に過ごす時がありましたか	413	2.44	1.01
Q 8	人が困っている時に、何かお手伝いをしていますか	413	2.65	1.01
Q 9	あなたは、ご自分の、幸福な生活を希望しますか	408	2.02	0.83
Q10	ご自分の能力を生かした生活をしていますか	409	2.49	1.09
Q11	ご自分の希望する生活を送ることは難しいと思いませんか(逆転)	405	2.90	0.98
Q12	人より優れた能力が何かあると思いませんか	404	2.99	0.82
Q13	趣味のある生活は大切だと思いませんか	405	1.77	0.82
Q14	あなたは、目標のある生活を送っていますか	404	2.66	0.99
Q15	日常生活で、ご自分のしたいことが自由にできますか	405	2.22	0.93
Q16	あなたは生きていることに大切な意味があると思いませんか	404	1.86	0.91
Q17	ご自分の可能性を、これから伸ばしたいと思いませんか	405	2.55	0.93
Q18	日常生活上の問題をご自分で処理できますか	404	1.99	0.90
Q19	現在あなたは、積極的な生き方をしていると思いませんか	404	2.50	1.01
Q20	ご自分の意志を家族や周囲の人に伝えていませんか	404	2.33	0.98
Q21	ご自分の将来の生活に、何か希望を持っていますか	404	2.81	0.92
Q22	毎日の生活は、充実していますか	404	2.43	0.89
Q23	ご自分のやりたいことをどの程度実現できると思いませんか	404	2.83	0.90
Q24	ご自分の希望を実現するために、なにか努力をしていますか	404	2.69	0.93

次いで、信頼性分析を行い、I-T相関が最も低い項目（削除した時、クロンバックの α 係数が最も高い項目）を削除した。相関係数（I-T相関）の最も低い項目は、全ての項目との相関が低く、遊離している項目であるとの理由からである。さらに項目選定ができない場合は、最も相関係数の

高い一組の2つの項目の一方を削除した。この作業を繰り返し、項目数を少なくした段階で、因子分析を行い、遊離した項目及び因子負荷量が0.4以下の項目を削除し、最終的に17項目を抽出した（表4）。

表4 自己実現尺度17項目のステートメント

自己実現尺度17項目のステートメント
現在、どの程度趣味に取り組んでいますか
同年輩の人と比べて、あなたは、現在、健康だと思いますか
世の中のために、役立つことをしたいですか
毎日の生活の中で楽しいことがありますか
人との出会いは、楽しいと思いますか
最近、お知り合いと一緒に過す時がありましたか
人が困っている時に、何かお手伝いをしていますか
あなたは、ご自分の、幸福な生活を希望しますか
ご自分の能力を生かした生活をしていますか
人より優れた能力が何かあると思いますか
日常生活で、自分のしたいことが自由にできますか
あなたは、生きていることに大切な意味があると思いますか
ご自分の可能性を、これから伸ばしたいと思いますか
日常生活上の問題をご自分で処理できますか
ご自分の意志を家族や周囲の人に伝えて入ますか
ご自分の将来の生活に、何か希望を持っていますか
ご自分のやりたいことをどの程度、実現できると思いますか

17項目の探索的因子分析を直行回転（バリマックス法）主成分分析により実施し、スケールとして望ましい下位尺度（因子構造）を確認した。また、遊離した項目及び因子負荷量が0.4以

下の項目がないことを再確認した。第5因子は所属因子が2と少ないが下位尺度としてまとまりがあると考えられる（表5）。

表5 17尺度項目の因子分析（主成分分析）（5因子）

質問項目	因子負荷量				
	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
自分の意志	.709	.172	.190	.260	.110
将来の生活	.690	.308	.204	.136	.264
やりたいこと	.609	.241	.234	.427	.077
自分の可能性	.450	.438	.136	.168	.405
優れた能力	.356	.694	.180	.089	.013
世に役立つ	.003	.675	.115	.291	.436
何か手伝い	.239	.593	.263	.107	.281
能力を生かす	.438	.559	.338	.174	.132
一緒に過ごす	.227	.182	.779	.146	.146
生活の楽しみ	.442	.154	.650	.189	.259
趣味の程度	.145	.427	.631	.287	-.017
人との出会い	.115	.148	.602	.131	.552
自分で処理	.251	.104	.080	.797	.177
自由にできる	.283	.156	.256	.679	.049
現在の健康	.059	.396	.408	.513	.123
幸福な生活	.135	.205	.116	.054	.778
生きる意味	.486	.070	.160	.220	.567
			寄与率 (%)		67.29

抽出された5因子への合理的で適切な命名ができることを確認した。第1因子には4項目が所属し「自分の希望の実現への意欲の強さ」と命名し、第2因子は4項目が所属し「自分の能力の社会的活用意欲と活用度」、第3因子は4項目が所

属し「毎日の生活を楽しんでいる程度」、第4因子は3項目が所属し「主観的健康度」、第5因子は2項目が所属し「自分の人生を大切に考える程度」と各々の因子に命名した（表6）。

表6 潜在因子への命名（5因子モデル）

因子	命名した因子名
第1因子	「自分の希望の実現への意欲の強さ」
第2因子	「自分の能力の社会的活用意欲と活用度」
第3因子	「毎日の生活を楽しんでいる程度」
第4因子	「主観的健康度」
第5因子	「自分の人生を大切に考える程度」

自己実現トータルスコアの分布

自己実現トータルスコアのヒストグラム（ $n=386$ ）を図2に示した。自己実現スコアの平均値は44.3点であり、標準偏差は10.91、最頻値は50点であった。最高値は65点であった。最頻値が平均値より右に寄っているが、ノーマルカーブに近い曲線を描き、正規分布のデータを扱う統計解析手法において従属変数として取り扱うことができると考えられた。

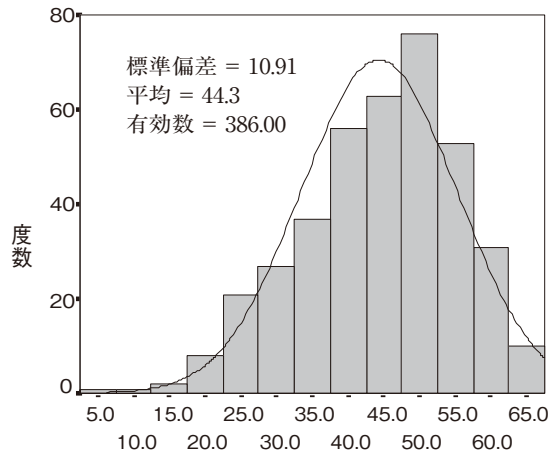


図2 「自己実現トータルスコア」

3. 自己実現尺度の信頼性と妥当性

本研究で開発した自己実現尺度（SAT-17）の信頼性をクロンバック（Cronbach）の α 係数を求めて評価した。最終的に386ケースの有効回答から計算されたクロンバックの α 係数は0.924であり、統計学的に十分に高い信頼性を示す値であった。妥当性は、プリテスト前の段階で4回のワーディング検討会を実施し、さらに、本調査前に福祉の専門家4人のチームで2回のワーディン

グ検討会を実施し、詳細に精査したことから、表面的妥当性は十分であることが確認されたといえる（表7）。

下位尺度の信頼性

自己実現尺度の5つの下位尺度を構成する観測変数が、所属している各下位尺度の構成概念をどの程度よく表現しているかを示す内的整合性について、クロンバックの α 係数を求め、評価した（表8）。

表7 自己実現尺度の α 係数

自己実現尺度の種類	N of Cases	Items	α 係数
プリテスト後24項目の仮尺度	42	24	0.891
本調査自己実現尺度17項目 (SAT-17)	386	17	0.924

表8 下位尺度の α 係数

下位尺度	N of Cases	Items	α 係数
第1下位尺度(F 1)	402	4	0.789
第2下位尺度(F 2)	403	4	0.810
第3下位尺度(F 3)	396	4	0.819
第4下位尺度(F 4)	411	3	0.703
第5下位尺度(F 5)	400	2	0.590

第1下位尺度から第4下位尺度までの α 係数は0.703～0.819であった。 α 係数の値は概ね0.6以上であれば内的整合性は証明されるといえることから、4つの下位尺度の内的整合性が十分であることが確認された。第5下位尺度の α 係数は0.590であったが、所属項目数が2項目であり、他の4つの下位尺度の α 係数より低い値を示すのはやむを得ぬことから、内的整合性は満足できていると考えられた。

4. 分散分析による基本属性が自己実現トータルスコアに及ぼす影響

基本属性が自己実現トータルスコアに及ぼす影響を確認するため、「自己実現トータルスコア」を「従属変数」とし、「16の基本属性」を「独立変数」とする分散分析を行い、その主要な結果をまとめた(表9)。

分散分析の結果から、高い「自己実現トータルスコア」を示す高齢者は、日常生活や社会的な場での状況を識別し判断する「判断力」が適正に機能し、また「メール」を媒介として、他者との人間的交流や情報の交換を頻繁に行っている傾向が確認された。

「同居人数」は、収入が同じ人の場合、「同居人数」が多いほど「自己実現トータルスコア」の得点が高いことが確認された。その理由は、「同居人」を一種の「他者」と見ると、「同居人数」は他者との交流の多さの間接的な指標であるといえるからである。

「電話やメール」の回数は、道具を媒介とした間接的な他者との交流や情報交換の頻度を示し、「同居人数」は、日常的な生活の場で、他者との交流の多さの頻度を示す間接的指標であるといえる。他者との交流の頻度の多さが、それぞれ独立

表9 多元配置の分散分析による下位尺度への影響 (有意確率)

No	基本属性	SUB1	SUB2	SUB3	SUB4	SUB5	自己実現トータルスコア
		希望を実現する意欲	能力の社会的活用度	生活を楽しむ程度	主観的健康度	人生を大切に考える	
1	性別	0.722	0.413	0.430	0.163	0.805	0.331
2	住まい	0.837	0.704	0.630	0.613	0.963	0.933
3	同居者	0.556	0.788	0.769	0.321	0.368	0.654
4	同居人数	*0.036	0.142	**0.008	0.330	0.154	**0.032
5	収入の仕事	0.246	0.616	0.961	0.994	0.051	0.723
6	仕事の程度	0.253	0.153	0.681	0.934	**0.001	0.436
7	最終学歴	0.745	0.686	0.856	0.718	0.087	0.913
8	移動の方法	0.287	0.156	0.114	***0.000	*0.024	*0.017
9	最長勤務	0.667	0.737	0.312	0.970	0.728	0.685
10	判断力	***0.000	***0.000	***0.000	***0.000	**0.001	***0.000
11	食事	0.783	0.971	0.813	0.795	0.571	0.949
12	聴力	0.209	*0.047	0.075	0.203	0.386	*0.036
13	電話・メール	***0.000	**0.005	***0.000	**0.003	**0.009	***0.000
14	外出頻度	0.840	0.712	0.673	0.467	0.112	0.975
15	収入金額	0.163	0.423	0.450	0.140	0.164	0.355
16	年齢注)	0.476	0.065	0.784	0.358	0.877	0.422

* : 0.05 > P > 0.01, ** : 0.01 > P > 0.001, *** : 0.001 > P

注) : 「年齢」は従属変数との単相関係数である。

的に「自己実現トータルスコア」を高める要因として影響を及ぼしていた。つまり、上位概念である「他者との関係」の頻度の多さは、「自己実現トータルスコア」を高める基本的な要因であるといえる。

「最終学歴」は、「男」「女」を別にすれば、それぞれに「最終学歴」の高さは、「自己実現トータルスコア」に統計的に有意に影響を及ぼしているといえる。

表11に示したように、最終卒業学校に関する平成12年の国勢調査では、高学歴の短大・高専、大学・大学院以上の学歴の者（70～74歳）は、15.7%にすぎない。高校卒以上では、53.2%であ

り、本調査の81.8%の値から考えると、高齢者のうち大学・大学院卒業者及び高校卒者の居住率がかなり高い地域であることがわかる。

5. 共分散構造分析（確認的因子分析）による尺度の検証

確認的因子分析による下位尺度の5因子間の相関係数行列を表12に示した。第1因子「希望を実現する意欲の程度」と第2因子「能力の社会的活用意欲と活用度」の相関（0.861）が最も高く、第4因子の「主観的健康度」と第5因子の「自分の人生を大切に考える程度」の間の相関（0.727）が最も低かった。

表10 男女別の最終学歴の分布

性別	度数%	新制 中学校	新制 高等学校	新制各種 専門学校	新制短期大 学	新制大学・ 大学院	合 計
女	度数%	38	114	11	16	8	187
		20.32	60.96	5.88	8.56	4.28	100.00
男	度数%	37	56	10	13	87	203
		18.23	27.59	4.93	6.40	42.86	100.00
合計	度数%	75	170	21	29	95	390
		19.23	43.59	5.38	7.44	24.36	100.00

表11 70～74歳の最終卒業学校（男女共）

区分	最終学校	人数	割合%
1	小学校・中学校	1,201,656	46.8%
2	高校・旧制中学校	961,722	37.5%
3	短大・高専	150,786	5.9%
4	大学・大学院	252,680	9.8%
	合計	2,566,844	100%

出展：編集総務省統計局「平成12年国勢調査第3巻その1全国編」
平成12年発行総務省統計局 P284

表12 確認的因子分析結果の因子間の相関行列（N=386）

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
因子1	1.000	*	*	*	*
因子2	0.861	1.000	*	*	*
因子3	0.820	0.840	1.000	*	*
因子4	0.852	0.819	0.842	1.000	*
因子5	0.844	0.801	0.782	0.727	1.000

因子分析により抽出された1次因子の5因子モデルの上位概念に、2つの2次因子「他者との関係性」と「個人の生活」を加え仮説とした高次（2次）因子モデルを想定し、この2次因子モデルと測定データの適合の程度を確認的因子分析により、3つの適合度指標CFI、TLI、RMSEAを用い評価した。

CFIは0.938と十分高く、TLIも0.926と高い値であった。ともに十分な適合を示す高い満足いく値であった。モデルとデータの乖離を表現する指標のRMSEAは0.065であり（RMSEAの許容範囲は0.08以下）、分析値はほぼ十分な適合を示す結果であった（表13）。

表13 2次因子モデルと1次因子モデルとの確認的因子分析結果

適合度指標	2次因子モデル	1次因子モデル
CFI	0.938	0.939
TLI	0.926	0.924
RMSEA		
Estimate	0.065	0.066
Probability RMSFA<=.05	0.004	0.003

- 1) CFI : Comparatative Fit Index : 0 ~ 1 (1に近い程適合がよい)
 TLI : Tucker-Lewis Index : (1に近いほど適合がよい)
 RMSEA : Root Mean Square Error of Approximation
 2) RMSEAの分析値は、0.08であれば許容範囲内、0.05以下が望ましく0に近づくことが理想である。(山本嘉一郎・ほか2006)

この結果から、自己実現の構成概念の仮説である2つの2次因子「他者との関係性」と「個人の生活」を上位概念とした2次因子モデルは、観測変数のデータによく適合していることが確認された。2つのモデルとも適合度は高いが、1次因子モデルの方が少し高い結果であった。

5つの下位因子の説明力は、2つの上位因子をどの位よく説明しているかを示す決定係数(R²)の値で示される。2次因子のうちの一つである「他者との関係性」を説明する一次因子の「能力の社会的活用意欲と活用度」のR-Squareの値は0.859であり、「毎日の生活を楽しんでいる程度」のR-Squareの値は0.820であった。また、2つ目の一次因子である「個人の生活」を説明する第1の一次因子の「希望を実現する意欲の強さ」のR-Squareの値は0.880であり、「主観的健康」のR-Squareの値は0.971であり、「自分の人生を大切に考える程度」のR-Squareの値は0.758であった。つまり、R-Squareの値は最高0.971(F1)から最低0.758(F5)であった(図

3)。R-Squareの値は、1に近い程、説明力が高いことから、「他者との関係性」と「個人の生活」の2つの上位概念を持つ高次（2次）因子モデルは、5つの独立変数が2つの従属変数をよく説明しているといえることが確認された。

IV. 考 察

適合度指標のCFIの値は、0.938であり、2次因子モデルの適合はよいといえる。適合度指標のTLIの値は、0.926であり、TLIの値は0から1の範囲で1に近づくほど適合がよいことから、2次因子モデルの適合はよいといえる。モデルの分布と真の分布の乖離を表現する指標のRMSEAの値は0.065であった。許容範囲は0.08以下であり、この値は0.05以下であることが好ましいことから、分析値は許容範囲以内であり「ほぼ適合がよい」といえる。これらの結果から、仮説とした2次因子モデルは、よい適合を示しているといえる。

高い「自己実現トータルスコア」を示す高齢者

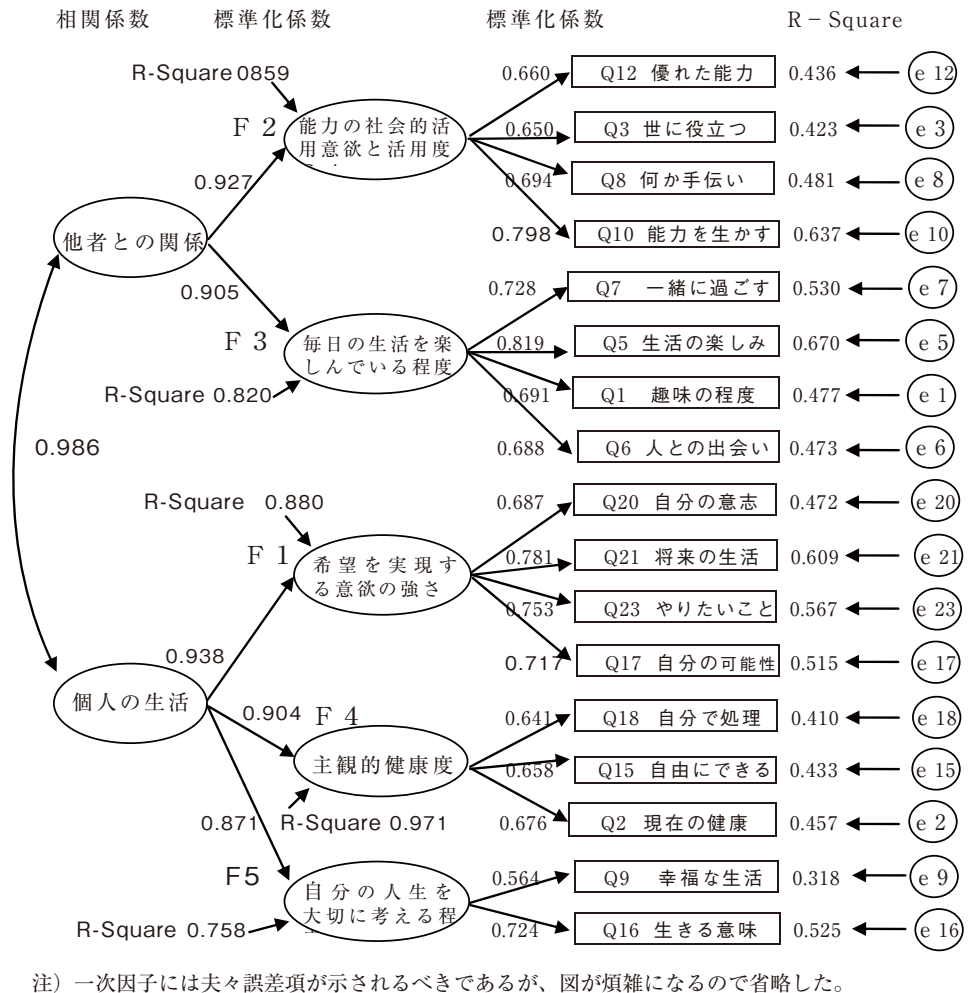


図3 自己実現の確認的因子分析モデルの分析結果（2次因子モデル）

は、日常生活や社会的な場で状況を識別し判断する「判断力」が適正に機能し、また「電話やメール」を媒介として、他者との人間的交流や情報の交換を頻繁に行う傾向があり、また、同時に「判断力」と「電話やメールの回数」は「個人の生活」を高めるということが確認された。

「同居人数」は、収入が同じ場合、「同居人数」が多いほど「自己実現トータルスコア」の得点が高いことが確認された。その理由は「同居人」を一種の「他者」と考えると、「同居人数」は他者との交流の多さの間接的な指標といえるからであ

ろう。つまり、「電話やメール」の回数は、道具を媒介とした間接的な他者との交流や情報交換の頻度を示し、「同居人数」は、日常的な生活の場で直接的に他者との交流の多さの頻度を示す指標であるからである。

他者との交流の頻度の多さが、それぞれ独立的に「自己実現トータルスコア」を高める要因としてプラスに影響を及ぼしているといえる。つまり、上位概念である「他者との関係」の頻度の多さは、「自己実現トータルスコア」を高める基本的な要因である。

「自己実現トータルスコア」を従属変数とし、「最終学歴」を最初の独立変数としたステップワイズの多元配置分散分析では、「男」「女」を別にすれば、それぞれに、「最終学歴」の高さは、「自己実現トータルスコア」に統計的に有意に影響を及ぼすといえる。

分析結果を総合すると、分散共分散分析から、「自己実現トータルスコア」の高い高齢者は「判断力」の機能が強く、また「電話やメール」の回数と収入が同じであれば「同居人数」の数は、独立的に「自己実現トータルスコア」を高めることが確認された。つまり、「電話やメールの回数」と「同居人数」はともに「他者との関係」を示す指標であることから、上位概念の1つである「他者との関係」の頻度の多さは、「自己実現トータルスコア」を高める重要な要因であるといえる。また、「男」「女」を別にした場合、男女それぞれの「最終学歴」の高さは、「自己実現トータルスコア」に統計的に有意に影響を及ぼすことが明確にされた。

V. 結論と今後の課題

結論として、本研究で開発した自己実現尺度 (SAT-17) は、表14に示したように、5つの1次因子と2つの2次因子「他者との関係性」と「個人の生活」から構成されている。

自己実現概念の操作的定義

確認的因子分析で検証された2次因子モデルから、自己実現概念を、『「個人の生活」と「他者との関係性」の2つの上位概念から構成され、上位概念の「個人の生活」は「希望を実現する意欲の強さ」と「主観的健康度」及び「自分の人生を大切に考える程度」の3つの下位概念から構成される。上位概念の「他者との関係性」は「能力の社会的活用意欲と活用度」及び「毎日の生活を楽しんでいる程度」の2つの下位概念から構成される。』と操作的に定義をした。

本尺度の研究の調査対象地域は、高齢者の最終学歴に占める高校卒業以上者の比率が81.8%とかなり高い地域であった。本研究の自己実現尺度 (SAT-17) は、大都市近郊の学歴が高い者の

表14 自己実現尺度 (SAT-17) 17項目のステートメント

2次因子	1次因子	自己実現尺度17項目のステートメント
他者との関係性	能力の社会的活用意欲と活用度	人より優れた能力が何かあると思いますか 世の中のために、役立つことをしたいですか 人が困っている時に、何かお手伝いをしていますか ご自分の能力を生かした生活をしていますか
	毎日の生活を楽しんでいる程度	最近、お知り合いと一緒に過ごす時がありましたか 毎日の生活の中で楽しいことがありますか 現在、どの程度趣味に取り組んでいますか 人との出会いは、楽しいと思いますか
個人の生活	希望を実現する意欲の強さ	ご自分の意志を家族や周囲の人に伝えてありますか ご自分の将来の生活に、何か希望を持っていますか ご自分のやりたいことをどの程度、実現できると思いますか ご自分の可能性を、これから伸ばしたいと思いますか
	主観的健康度	日常生活上の問題をご自分で処理できますか 日常生活で、ご自分のしたいことが自由にできますか 同年輩の人と比べて、あなたは、現在、健康だと思いますか
	自分の人生を大切に考える程度	あなたは、ご自分の、幸福な生活を希望しますか あなたは、生きていることに大切な意味があると思いますか

居住率が高い住宅地域の元気な高齢者を対象に開発されたものであり、地方小都市や農村部などの地域に適用可能かどうか不明である。今後このような地域において、継続調査を行い、地域的な交差妥当性を確認することが必要である。

なお、在宅高齢者の中でも、自立歩行が困難でADLやI ADLの低い高齢者や、軽度の認知症高齢者に本尺度が適用可能かどうかは今後検証する必要がある。本研究で積み残した大きな課題は、PGCモラルスケールや人生満足度尺度など相関が高いと予測される他の尺度との比較検討である。高齢者の主観的幸福感尺度と自己実現尺度を同時に調査し、相関の程度や各種独立変数との関連性の相違を調べ、自己実現尺度の固有の性質を明らかにすることが必要である。こうした作業を積み重ね改善が進み、完成度の高い自己実現スケールができ上がれば、自立度の高い高齢者を対象とする各種サービスの効果の評価尺度として活用が可能となるであろう。

高齢社会では、高齢者が可能な限りいつまでも、心身の健康のレベルを高く保ち、自立した生活を続けるよう期待されている。そのためには、高齢者自身の若い時からの努力とともに、高齢者の心身の活動レベルを高く保つための社会サービスを充実する必要がある。現在までに高齢者の身体的健康の保持増進のサービスについては、有効な方式がほぼ確立されてきているが、自己実現などの精神の活動レベルの維持、増進のサービスは、どのようなものが、またどのようなやり方が有効なのか必ずしも明確になっていない。自己実現尺度は、今後これらのサービス方法の開発に有効な、1つの道具として役立つことが期待される。

(注)

- 1) PGCモラルスケール：Philadelphia Geriatric Center モラルスケール（ロートンらが開発したモラルスケールである。）；Lawton,M.P. (1975)

【引用文献】

- Goldstein,K. (1939) *The Organism*, New York : American Book.
- 古谷野亘 (1982)「生活満足度尺度および幸福度尺度の共通次元と尺度間の関連性」『社会老年学』(4),142-154.
- カント研究会編 (1997)『自由と行為』晃洋書房.
- Kant, I. (1785) *Grundlegung zur Metaphysic der Sitten.*, (1788) *Kritik der praktischen Vernunft.*, Vorarbeit zur Kritik der praktischen Vernunft . (=2000 坂部恵・平田俊博・伊古田理訳『カント全集7 実践理性批判 人倫論の形而上学の基礎づけ』岩波書店.)
- Kant, I. (1797) *Die Metaphysik der Sitten.*, (= 2002 樽井正義・池尾恭一訳『カント全集2 人倫の形而上学』岩波書店.)
- Heidegger,M. (1961) *Nietzsche,2Bde.*, Verlag Gunther Neske. (= 2007 (1976) 藪田宗人訳『ニーチェ I』白水社.)
- Nietzsche,F. (1901) *Nietzsches Werk,Taschen-Ausgabe* 9. (= 1970 原佑訳『ニーチェ全集第11巻 権力への意志』理想社.)
- Maslow,A.H. (1962) *Toward a Psychology of Being*, D.Van Nostrand Co.Inc. (= 1964 上田吉一訳『完全なる人間』誠信書房.)
- Maslow,A.H. (1971) *Motivation and Personality, second ed.*, Harper & Row, Publishers, Inc. (= 1987 小口忠彦訳『人間性の心理学』産能大学出版部.)
- Maslow,A.H. (1971) *The Farther Reaches of Human Nature*, Viking Press Inc. (= 1991 上田吉一訳『人間性の最高価値』誠信書房.)
- Frings,M.S. (1965) *A Maxschler. A Concise Introduction into the World of a Great Thinker*, Duguesne University Press. (= 1989, 深谷昭三・高見保則訳『マックス シューラーの倫理思想』似文社.)
- Scheler,M. (1913-16) *Der Formalismus in der Ethik und die materiale Wertethik, Neuer Versuch der Grundlegung eines ethischen Personalismus*, Sachregister, Max Niemeyer Verlag, Hall a. d. S. (= 1976,飯島宗享・小倉志祥・吉沢伝三郎訳『シューラー著作集1 倫理学における形式主義と実質的価値倫理学(上)』白水社.) 小倉志祥著 (1989)『倫理学概論』似文社.
- 高橋龍太郎 (1995)『精神機能評価法 意欲・モラル・QOLの評価法』『高齢者の生活機能評価ガイド』医歯薬出版(株),51-58.
- 岩谷力・飛松良子 (2005)『障害と活動測定・評価ハンドブックー機能からQOLまで』南江堂,17.
- 江藤文夫 (1995)「ADLの評価方法」『高齢者の生活機

- 能評価ガイド』医歯薬出版,12-22 v.
- Sell, H. et al (1992). Assessment of Subjective Well-being : The Subjective Well-being inventory (SUB1). *Regional Office for South-East Asia, World Health Organization.*
- Lawton, M.P. (1975). The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale : A revision. *Journal of Gerontology*, 30, 85-89.
- 前田大作・浅野仁・谷口和江 (1979)「老人の主観的幸福感の研究」『社会老年学』(11) : 15 - 31.
- 長谷川・藤原佳典・星旦二 (2001)「高齢者の『生きがい』とその関連要因についての文献的考察」『総合都市研究』(75), 147-170.
- 高橋勇悦・黒岩亮子 (1999)「中国における都市高齢者の『生きがい』」『総合都市研究』(69), 109-118.
- 松本啓子・渡辺文子 (2004)「後期高齢者の Successful Agingの意味」『日本看護研究学会誌』27 (5), 25-30.
- 佐藤富美子 (1998)「在宅療養者の自己決定を支える訪問看護婦の認識と方略」『日本看護科学学会誌』18 (3), 96-105.
- 佐瀬真粧美 (1997)「老人保健施設への入所にかかわる老人の自己決定に関する研究」『老年看護学』2 (1), 87-96.
- 茅ヶ崎市総務部行政総務課編 (2005)『茅ヶ崎市の人口と世帯 平成17年7月号』茅ヶ崎市
- 総務省統計局編 (2004)『平成16年全国消費実態調査報告第7巻 高齢者世帯編』総務省統計局 P368
- 収入総務省統計局編 (2000)『平成12年国勢調査第3巻その1 全国編』総務省統計局 P45
- 職業総務省統計局編 (2000)『平成12年国勢調査第3巻その1 全国編』総務省統計局 P296
- 山本嘉一郎・小野寺孝義編著 (2006)「Amosによる共分散構造分析と解析事例」第2版 ナカニシヤ出版.

Development of a Self-Actualization Scale for the Elderly Living at Home

— Development of a Self-Actualization Scale and
Manipulative Definition of Self-Actualization —

Kiyoshige, Tetsuo

The purpose of this study was to develop a Self-Actualization Scale for elderly persons living at home. The basic concept of self-actualization was extracted from the works of four great thinkers : Kant, Maslow, Nietzsche and Scheler. 451 key words were selected through a review of previous studies and previous research in Denmark. Questionnaire items were made from these key words. A pretest research survey was also conducted. The sample size of the survey was 1,110 elderly living at home. The questionnaires were mailed to the respondents, and the effective responses were 413 (36.8%).

A Self-Actualization scale, consisting of 17 items, was extracted through the repetition of reliability analysis and factor analysis. 5 related factors were also extracted as a result of exploratory factor analysis. As a result of variance analysis, it was confirmed that Self-Actualization scores were likely to be high among elderly who had the ability to make judgements; for example, making many telephone calls or emailing several times a day. It was confirmed that this scale was adequately valid and reliable.

Covariance Structural Analysis was done to inspect a second-order factor structure. Based on these results, satisfaction with the suitability of the model was confirmed, and a “Self Actualization Score (SAT-17)” was developed. As a result, a concept of Self-Actualization was defined through the manipulation of the factor structure of the scale.

Key Words : Self-Actualization, The elderly living at home, Scale, Factor analysis, Covariance structural analysis

